



TITLE:

ヴェスタのいたづら：トピック

AUTHOR(S):

山本

CITATION:

山本. ヴェスタのいたづら：トピック. 天界 1938, 18(205): 49-53

ISSUE DATE:

1938-04-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167654>

RIGHT:

近頃の面白い話です。それは去る四月六日午後のことでした。岡山縣の倉敷天文臺主任小山理學士から京都の拙宅へ電話がかゝつて來て、

『岐阜縣のA氏から電報が來ましたが、それによると、同氏が四月五日午前〇時十分に觀測した處では、蛇遣ひ星座のV星の近くにあるB.D. 114139といふ星が七等級になつてゐるが、元來此の星はボン天文臺の記録などでは九・六級ですから、何だか變だ云ふのです。倉敷では今夜晴れたら觀測するつもりですが、京都の方でも御調査願ひます。』

といふのでした。此の電話が來た時、私は大阪のプラネタリウムに出張してゐましたので、宅からは早速此の事を又電話で傳へて來ました。

ウ
エスタの
いたづら
★トビツク★

そこで、私は直ちに大阪から京都の花山へ電話をかけ、稻葉理學士を呼び出して、其の夜は此の星の調査觀測をするやうに打ち合はせをし、尙ほ、滋賀縣の木邊氏にも電話で此の事を知らせて、夜の觀測を依頼したのでした。

私は其の日午後九時頃に京都の宅へ歸つて來ましたので、取り敢へず、再び花山の稻葉氏に電話しました處が、稻葉氏は

『問題の星の觀測をする準備をしてゐますが、これが東天に見えて來るのは十時過ぎてせう。異狀があれば直ちに御知らせします。』とのことでした。

ところが、まもなく、宅の伴Sが、

『あの星の近くに小遊星ゴスタがあるやうです。如何でせう?』

といふものですから、私は『さては!』と思ひながら、よく／＼天體曆を調べ、大英天文協會のハンドブックにあるゴスタ星の豫報位置を稻葉氏にも通知して、歳差の計算などから、念のため、問題の星とゴスタ星との位置關係を確めて貰つたのですが、同氏の觀測の結果、小山氏から知らせて來た九等星には何の異狀も無く、その近くには果してゴスタ星が大きく輝やいてゐることも確められました。之れで問題は解決し、小山氏にも電話で此の事を知らせました。

右と同樣なことが、實は、今迄に二度あつたのを私は思ひ出します。一は正十四年頃、京都の大學天文臺で、或る夜、中村要君が『オリオン座のU星の近くに、新星らしい赤味がかつた星が見える』といつて騒いだことがありました。それから又、今より三四年ばかり前にも同様な『新星らしい』といふ知らせを地方の或る會員から花山で受けたことがありました。——二回とも、何れもこれは「エスタのいたづら」でした！

エスタといふ星は今を去る百三十餘年の、一八〇七年に、第四番目の小遊星としてオルバースが発見したもので、軌道の形は平凡な橢圓形ですが、全小遊星中、光輝が最も強く、對衝の時などには、六等級にもなり、肉眼に見えることがあつた明るさのものです。従つて、望遠鏡で黃道附近を見てゐる時に、フと此のエスタ星が視野の中に現はれて、驚かされることがあります。殊に變星の觀測者などは、平常、見慣れてゐる星野の中へ、此のエスタ星に見舞はれて、狼狽させられることが屢々あるわけです。

天界第二〇三號の**天象欄**には**ジュノ**や**エスタ**の位置の表がありますが、此等は、只この星々の位置の観測者のためのみでなく、**變星**の観測者のためにも、必要なものと言ふべきでせう。

過去十年間に三回も吾々がいたづらされた此の**エスタ星**の位置は、今後又同じ事を繰り返さないために、毎年**天界**に豫め發表することにしませう。

話の序でに——「**エスタ**」*Vesta*とは古代ローマの女神の名です。ギリシヤでは之れを「**ヘスチャ**」*Hestia*と呼び、**クローノス神**を其の父、**レア神**を其の母とし、元來は家庭の中心たる**爐火**を護る女神として崇められました。が、ホーマ以後の時代には、**オリンポス山**の十二神中の一に數へられました。神話によれば、この**ヘスチャ女神**は、一時、**アポロ神**又は**ポセイドン神**の妻となることを望まれましたが、何れも其れを拒絶して、永久の處女神たることを誓ひましたので、**ゼウス大神**は之を嘉して、犠牲の聖火を主裁する役を與へました。

ローマの「**エスタ**」神は、やはり火を護る女神であります。元來、大昔しの時

代には、火は家族生活に必要なものでしたが、一旦之れが消えると、再び之れを點火するのが容易でなかつたため、火を永久に消さないやうに護ることは家中の處女たるものの神聖な役目でありました。従つて、ロマの家庭では、六歳から十歳までの少女が「消えざる火」を護る役目を命ぜられる習慣でありましたが、ロマ共和國の時代に至つて、バラチノ丘上に壯麗なゴスタの神殿が建設され、之れには多くの處女が仕女として任命されて、一國の聖火を護るものとなりました。ゴスタ神を祭る祭日は毎年六月九日といふ定めでありました。そして、其の翌日から、六月十五日までは、宮潔めのため、此の神殿を閉ぢることとし、此の一週間は、大凶日と考へられたと言ひ傳へられます。

ロマに於けるゴスタ神の崇拜は一時は非常に盛大に行はれましたが、キリスト教が流布し、其れが公認されるやうになつて、西曆三八二年に、グラチャン帝が遂に此のゴスタの神殿を破壊して了ひました。今は只、星の名にのみ此の神の名が残つてゐるのもあはれてあります。(山本)